

協議概要

発言者	発言内容
<p>読書活動についてのグループ協議 <span style="float: right;">※進行：竹内委員長</span></p>	
<p>進行</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 主に家庭における読書活動の推進と地域、職場における読書活動の推進について、令和3年度の取組や今後の取組について進めていきたい。</li> <li>○ 「読書サポーター活動促進事業」の映像を見たが、中学生が参加していることに興味をもった。中学生や小学生、県民の方もそうだが、啓発の対象にするのではなく、啓発する側に回るようにしないと意味がないと思う。高校生が中学生、中学生が小学生に何かを行うことは様々な場面であるが、逆のプロセスが生み出されると、子どもが親を啓発していくことになるかなと思った。下の学年ではなく、上の学年にいく筋道の実践があるとよい。</li> <li>○ この研修は、図書委員の中学生が参加させられたのだろうと思って見ていた。彼らが、次どういう活動をするかに着目した。そうすると、「読書サポーター養成研修会」という名称でいいのかという点に疑問が出た。「読書ファシリテーター養成研修会」はどうか。サポートとすると、読んでいない人に「読ませる」が入るので、少し違う気がする。積極的に読んでいる人が、読んでない人を引きつけていくような、関係ではないか。</li> <li>○ 学校図書館の蔵書構成の説明があったが、小学校の図書室改装を行った際、NDCの0から9まで何冊あるかを調べたが、自然科学が確かに少ない。自然科学の本をプラスしたいが、1冊の単価が高い。良い図鑑を入れようとすると、1冊5000円ぐらいする。学校の先生に「5000円で1冊入れるなら、1000円の方を5冊入れたい。」と言われた。その葛藤に悩んだことを思い出した。</li> <li>○ 見える化することは大事だと思っており、大学のシンクタンク機能として活用してもらっても面白いなと思う。調査研究を依頼すると、この学生や、院生が各学校の蔵書の構成を調べて、見える化していくと次のステップが見えてくるので、もっとしたほうがいいと思った。</li> <li>○ 読書活動推進計画の管理指標である「家庭で読書に取り組む割合」について、単純に増やそうと思うと、読み声を小学校では行っているが、解釈を変え、親がどう読んだかを聞けば、数値は急に上がると思った。多分そんな宿題は誰も出さないだろうと思っている。家庭で、教科書の物語を読むことが宿題になることがあるが、そうではなく、「ねえお父さん、ごんぎつねは最後、兵十とわかり合えたと思う？」と聞いてきなさいという宿題を出すと、親はごんぎつねを読まざるをえなくなり、家庭での読書の取組は、増えるだろうなと思って聞いていた。この反転をどう作るのが難しいと思っている。読まされる対象ではなく、読んでしまいたくなるような主体にする。今想定しているのは、かなり意識が高い子どもの家庭である。どう思うか聞かれ「わかり合えたと思う。」と親が言った時、この解釈に対して、「それは違う。」という子を想定している。自分たちが読んできたのであれば、主体的に聞けるのではないかと聞いていた。</li> </ul>

	<p>○ 事務局説明の中で気になったのは、「調べ学習」と「探求」が、近い関係で示されていたことである。私からすると全く別の活動である。「調べ学習」は自然科学系で、問いを絞っていき、疑問ができたなら、図書館に行って、レファレンスサービスで調べる。例えば、「宮崎県の焼酎で一番売れている銘柄は何か」と聞けば、それに関する資料が出てくる。これに対し、「探求」は主に社会科学なので、問いの形が全然違っている。例えば、「英語教育が、小学3年生までおりたが、それについてどう思いますか。」という問いに対し意見を求めるのが、社会科学である。問いについて、考えを述べる際の根拠やデータを調べていくのが「探求」なので、本の読み方が全然違う。他者の意見や、自分の意見をそんなことを考えなかった人に説明するために、何かデータを持ち出してくるのが「探求」なので、本の扱い方が全然違っている。調べ学習のレファレンスは簡単だが、「探求」のレファレンスは結構難しいはずである。その分野の第一人者は誰かを知らないと答えることができないはずであり、高校生の読書活動は受験に直結するのもあって、かなり広がる感じもした。ところが、手が出せるかどうか疑問であると考えた。</p>
森山委員	<p>○ 「読書サポーター養成研修会」の映像を見て、いい取組だと感じた。この講座が私のいる延岡で開催されていなかったの、ぜひ開催できるように、お願いしたいし、自分も何か働きかけていけたらいいと思った。</p> <p>○ 学校司書の話があったが、昨年3月、PTAで子どもたちに還元しようと図書室の本を数十万円分買った。これはよかったが、図書を入れ、図書室を先生と保護者でリニューアルしたいという話はなかなか具体的に動いていかなかった。先生方もやはり忙しかったと思うが、学校司書がいるともっとスムーズに進んだのではと感じた。ぜひ今後の取組として、一緒に考えていきたい。</p>
進行	<p>○ 今、コミュニティ・スクールが導入され始めており、中学校区ぐらいの範囲で、地域と学校の間を密接にしていこうと動きがある。その活動の中にもうまく読書のことが入ってくると、この「読書サポーター養成研修会」のようなことが学校単位でできるようになる。学校運営協議会の中に、図書や、読書に詳しい方がメンバーとして入るかどうにかかっている。学校運営協議会の中にもうまく入ると、地域単位で中学生に対し、地域で読み聞かせをしている方が、「読書サポーター養成講座」をし、小学校に出向くことがおそらくできる。読書活動と、コミュニティ・スクールの動きが、うまく連動するかどうかはとても大事だと思った。</p>
中村委員	<p>○ 単純に多くの方が、もっと興味をもち、読んでもらうにはどうすれば良いかを考えた。私は書店を経営しているが、本屋に入り、買って帰る方は大体3割ぐらいと言われている。大抵は、特に本が欲しいと思って本屋に来るわけではなく、時間つぶしや、「何かおもしろそうのあるかな」みたいな程度で来る。そういったお客さんに我々本屋が、どうすれば1冊でも買ってもらえるかを考えている。</p> <p>○ 本屋に来るお客について、三つぐらいタイプがあると思っている。その一つは、欲しい本を探しに来る人、買う気がある人である。特定の分野の、例えば、料理の本を買いに来た人や、子どもへのプレゼントを探している人、それから、試験を控えている人が参考となる本を買いに来る、そういう何か特定の目的があって来る人である。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 次に、多くの人が読んでいる本、ベストセラーになっている本はものすごくたくさん売れる。しかし、1位が10冊売れて、2位が5冊売れて、あとはもう1冊程度というぐらい売れ方の差が顕著になっている。特に去年は、「鬼滅の刃」がものすごく売れたが、それ以外の本はそれほど売れていない。</li> <li>○ 最後に、読みたい本があったわけではないが、本屋の仕掛けに釣られて買う方である。例えば、夏だったら、キャンプの特集、年末だと、おせち料理の特集などの仕掛けをすると買う人がいる。</li> <li>○ 読書に興味をもってもらうことは、本屋が、お客さんの気をひこうとしているやり方にヒントがあるのではないかと思った。</li> <li>○ 誰かから薦められて読むケースも結構あると思う。アマゾンなどもそうだが、ネットには読んだ感想を紹介するサイトがたくさんある。しかし、その紹介文を書くのもつらくなることもある。YouTubeのような動画サイトに、30秒とか1分ぐらいで、いろんな本の感想をどんどん載せ、県民が気軽にアクセスできるサイトがあればよいのではないか。ビブリオバトルをオンラインで行った取組の報告があったが、ビブリオバトルは1人の紹介時間が長い。短時間で、いつでも見られるようにするとよいのではないか。</li> <li>○ 委員長（進行）が、「読書サポーター」を「ファシリテーター」とするとよいのではないかと言われたが、なるほどと思った。サポートというより、よりみんなに影響を与えることが簡単にできる仕組みがあるとよいのではないか。お金がかかるかもしれないが。</li> </ul>
進行	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「みらい・みやぎきまなび隊」で本の紹介をしているが、紹介が一つに集まったサイトは確かにない。</li> <li>○ ビブリオバトルについて、逆も考えている。ビブリオバトルの1位から3位ぐらいまでを、「ビブリオエッセイ」に書き換えることができれば、それを宮日に掲載してもらうことは可能だと思っている。メディアを渡するような形で、うまく活動が連動していくとよいのではないか。ビブリオバトルの歴代のチャンプ本が十数年蓄積され、活動が繋がっていくと相乗効果が出てくるのではないか。</li> </ul>
井澤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ネットを使った広報は、賛成でぜひ進めるといいと思う。テレビを見ている中・高生は少ないと思うので、その見ている媒体を目指したコンテンツにする必要がある。企業がやっていることは、マーケティングをして、デザインされているものであるが、行政は、真面目な考えに立っていると思う。コンテンツの内容を見る人に特化するというより、幅広い方に語弊なく伝わるような言葉遣いになっている。中高生が多く見るツイッターやインスタにおすすめの本がたくさん流れるのもいいかもしれない。内容については民間のWebデザイナーみたいな方の力を使うとよいのではないか。今まで関わったことのない子どもが見たいな、と思うようなのを紹介していく、その更新を毎日とか、3日に1回とかにすると、引っかかっていくのではないか。</li> <li>○ 数値目標の達成について、今まで関わってない人たちに、いかに肯定的な感情をもってもらえるかが大事だと思う。それは、宮崎県だけに限らず、この本を読んで、この事業を思いついた、インスパイアされたといった方法で紹介していくとよいのではないか。今まで、宮崎県の推進に関わった人たちが、「この本読みました。」というのは見た経験があるが、そうではなく、社会の第一線で活躍している方が、その本読んで思いついたことを知りたいのではないか。</li> </ul>

井澤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 読む支援について、貧困やひとり親家庭、LDやディスレクシアの子どもたちなど、課題がたくさんある子どもへのサービスは分けて考えていきたい。その子どもたちが読み、楽しくなっていく方法は、学力が高い子どもたちの会話と全く違う。読書の時間を確保することがとても難しいので、別のアプローチが必要だと思う。</li> <li>○ 人的配置に関しては、いつも司書や教職員に対して指摘がある。宮崎県で働いている司書は、地域により差があると思う。例えば、採用されて1年目の人を司書D、公共図書館で働いている人を司書C、学校図書館で働き始めて1年目から3年目を司書E、高校大学で、勤務した人を司書A、最後に、探究のレファレンスできる人を司書A+とするみたいに、司書をカテゴリー分けし、待遇を少しずつ変えていくと、司書Dの人もEの人もそこを目指したいと思うのではないか。司書A+の人がいる図書館で探究に使ってもらえば、図書館は意味があるのだと思ってもらえる。</li> <li>○ 司書A+の人は、後身を育てる必要があると思う。公務員だからとか、会計年度任用職員だからとあって、皆同じ給料にしていることで、他県の優秀な司書が、この県を受けないということにもなっているのではないか。</li> <li>○ 家庭での取組について、家庭読書の支援内容に差があるので、それを学校ごとに充実させていくことが、簡単ですぐやれることではないかと思った。</li> </ul>
進行	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 確かに教員は指導教諭といってカテゴリー化されており、大学教員になっていく道も開かれているために、ステップアップがある程度イメージできるようになってきた。それでもまだ足りないとは思いますが、司書の世界はフラットなので、何を目指していくのかが、見えないところはあると思う。何をすれば、みんなにとって意味のある仕事になっていくのかが伝わっていくと、中高生も司書を目指していく一つの形になると思う。</li> <li>○ 今年、人権啓発の事業を大学がやっているが、その専門家である弁護士の講演の際、最後に「先生が最も触発された本はありますか。」と聞くと出てくる。やはり、一線で活躍している人はみんな、パートナーとしての本を持っている実感があるので、そこを洗い出していくとよいのではないか。トヨタの新開発車の整備をしている方が宮崎にいるが、その方にも、「大事にしている本ありますか。」と聞くとやはり出てくる。もちろん私も読んだことのないような本であるが、それなりに皆さん持っているのだから、別ジャンルの一線の方が、どう読書に取り組んでいるかが見えてくると憧れをもって本を読むのではないか。</li> </ul>
相良委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 中学、高校の学校司書という立場から話をしたい。勤務校は一斉読書をやっていない。2年前まで月1回、一斉読書があったそうだが、コロナ禍で休校になり、授業時間確保ということで無くなった。一部の先生方が学期末に、生徒を図書館に連れて来てちょっと読んでいる。そういう時間を作っている学級は少ない。本を読みに来る生徒、本当に読書に来る生徒しか図書館に来ないような状況であるが、今年は大変来館者数が伸びたので、少しは良かったと思っている。しかし、その伸びは中学生が主である。勉強との兼ね合いもあるが、高校生の読書離れをどうにかすることが重要である。勉強との兼ね合いもあると思うが、そこをどうにかし、充実させていくことが大学、社会人になってからの読書に繋がっていくのではないかと思い、毎日接している。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「探求」に関する読書は、3年生が中心になってくると感じている。大学受験のために、専門書を読みに来る生徒が大変多い。</li> <li>○ 「YAに薦める推し本2021」というものが図書館総合展での企画の一つであった。埼玉や神奈川、京都などの高校の学校司書が意見を出し合い、年1回や、半年に1回、学校司書が選んだ本を紹介する企画である。埼玉県为学校司書が中心となって行っているこの取組を、全国に広める勉強会に参加した。このような取組があると、県内の高校の学校司書のスキルアップにも少し役に立つのではないか。</li> </ul>
進行	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 今は大学の卒論の締め切り時期で大変であるが、うまく取り組めていない学生は最後の参考文献を見ると、インターネットの閲覧記録が出てくる。ちゃんと探究できた学生は、図書が出てくる。何が違うかという他者意識が違う。こちらから話し掛けて、読んでいる子は「調べ学習」であり、「探求」が起こらない。自分のテーマに対して意見を言われているという感覚で読めると「探求」になる。教えるのに1年程度かかるが、ここができると全然違う。</li> <li>○ 広島大学に集中講義に行った時、宮崎大学との決定的な違いは、資料を出して「読んでおいで」と言うと、宮崎大学の学生も真面目なので読んでくるが、広島大学の学生は、参考文献で紹介されている本も読んでくる点である。そして、自分の意見をもって参加する。宮崎大学の学生は、意見ではなく、感想である。テーマについて意見を述べようとする、その方が読んだ本を読まざるをえなくなるので、「探求」ができていく子は、本が広がっていく。ここをどう創るかが、高校、大学は結構難しいと思っている。それなりの読み応えのある本に出会わせるという意味では、柔軟である程度のジャンルを絞り、その司書の方が探求してこないといけない。</li> <li>○ 南高校の課題研究を見ているが、その中に、「どうやって交通事故をなくすか」というテーマの生徒がいた。教育学の分野は本の紹介できるが、このテーマは自分から出てこない。一度資料が出てくると、その後どのように調べるかはイメージできていくので、その辺が相乗効果的に、生徒も、それを取り巻く大人も変わっていく仕組みがうまくつくれるといいと思っていた。</li> </ul>
小坂委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ベストセラーが売れるという話について、なるほどと思いながら、聞いていた。今の生徒たちは、お勧めする本をすぐ知りたがり、それを読みたがる傾向があると思う。期待しない方を読んで面白かった時の感動があったが、今の生徒は薦められた本を読み、安全な読書をしたいと思っている気がする。</li> <li>○ 最近、筒井康貴さんの「残像に口紅を」を読みたいという生徒がいて、何故かと思ったが、TikTokで紹介されていることを知った。高校生はTikTokが凄く好きでTikTokで紹介された「ドグラ・マグラ」を読みたいなど、今までにない読書をしたがる生徒が増えており、いいなと思っている。宮崎県も利用できないかなと考えている。TikTokは面白いので委員の皆さんも1度見てみるといいと思う。</li> <li>○ 「読者サポーター養成研修会」について、今まで出た意見のように、ファシリテーターに繋がると良い。保育の授業の際、読み聞かせの読書支援をしたが、高校生が読み合っている姿が微笑ましく、読書の広がりを感じる嬉しい時間だった。家で読み聞かせをしてみるとさらに深まりが出るのではないかと考えたので、家庭科の先生に相談したい。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校図書館のパソコンについてであるが、現在のパソコンが古く、調べ学習用のパソコンが置けない状況である。本は県立図書館からのマイラインで補うことができているが、学校図書館の ICT 環境も変えていくことができると良い。</li> </ul>
中山委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国語科の学習のゴールで利用する本について、西都市立図書館に依頼すると配達及び回収をしてもらえる。この連携が充実しているので、学びに大変役に立っている。</li> <li>○ インターネットは子どもが使うと、必要な情報を選択するだけで、時間がかかってしまい、効率が悪いと感じており、子どもたちも感じている。その点、本は、目的がある場合、読みたい本をピンポイントで選び、読むことで深められるので、やはり本はすごいと子どもたちも感じている。引き続き、図書館の力も借りながら、学習に役立てていきたい。</li> <li>○ 環境づくりについて、小学校段階で、何のために、本を読むのかにこだわっている。本で教養高める、語彙力をつける等いろいろあると思うが、人と人とを結ぶ役割があると感じている。</li> <li>○ 12月の読書月間の際、全校で「読み聞かせレストラン」という取組を行った。教室の入り口に「愛と勇気の小さな子どもの成長物語」といったキャッチーなテーマを書いたボードを掛けておく。子どもたちは登校後、キャッチフレーズを見て、自分が読みたい教室に行く。学級の枠を外れ、自分で読みたい本を選ぶという取組を継続して行っている。子どもたちにもおすすめの本を紹介してもらい、感想を聞きながらキャッチフレーズを考え、次の取組につなげている。今後、子どもたちが相互に読み合いできる環境づくりもしていきたい。子どもたちは、本気で楽しそうなキャッチフレーズの本を選んでいるため、喜んで聞いてくれる。継続した具体的な取組を、今の環境で無理せずどう取り組んでいくかが自分自身の課題でもある。</li> </ul>
玉城委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼稚園から本に親しむという角度で幼稚園での取組をお伝えしたい。小児科の先生の「スマホ社会の落とし穴」という話を聞いてきた。そして、これまでの、この読書活動推進委員会での話を聞き、小さい子どもたちには、デジタルの刺激が大変強く、絵本よりも強いデジタルの刺激を好んでしまう傾向が強いということ考えた。</li> <li>○ 研修の中で、親子の応答的な関わりが子どもの心を育てるといった話があった。ただ「ゲームはさせないで」とか、「スマホはダメだ」と母親に伝えるより、「絵本の読み聞かせやわらべ歌遊びなどが喜ぶますよ」といった代替えツールを伝えていかなければいけないと感じた。</li> <li>○ 幼稚園には子どもたち向けと保護者向けの貸し出し文庫がある。この取組の中で、絵本に触れてもらい、その後の読書習慣に繋がるといいなと思っている。</li> </ul>
鶴丸委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 現在、市で「生涯読書活動推進計画」を立てている。幼稚園の先生方もご存知のとおり子どもたちだけでは読み聞かせといった読書推進が繋がらないので、保護者を含めて考えている。異世代への取組や、子どもから親への読書への呼び込みなど面白いと思う。</li> <li>○ コロナ禍により学校での読み聞かせや一斉読書が減っている。調べ学習も</li> </ul>

	<p>おそらく形だけで終わっている。社会教育と学校教育の垣根がある点について、まだまだ宮崎県としても考えていかなければいけないところではないかと考えている。</p>
小島委員	<p>○ 「読書サポーター養成研修会」に携わっている。前回の会議でも伝えたように、このサポーター研修会をきっかけに、ボランティア団体への加入に繋がった例もある。3年計画の最終年度である令和4年度は、集大成として、市町村における読書活動の推進体制を整えるために、研修内容も、これまでどおり、選書や、発声などの（スキル）向上を行い、スキルアップコースについては、ボランティア団体の意見や要望等を聞く、意見交換会を実施していただきたい。</p>
事務局	<p>○ 第2回の「宮崎県読書活動推進委員会」を受け、指導体系表の作成や、調べ学習リーフレット作成等の手立てが提案された。調べ学習のリーフレットを作るためには、司書の階層化が必要である。循環していくような形で、いろんな活動が繋がっていくと発展するではないか。スタートとしてはこれでよいと思う。取組が1回で終わるのではなく、バージョンアップしていくために、人材育成で研修の系統化をした後、司書のレベルを見える化していくような営みがあると、作られた指導体系表や調べ学習、探求のリーフレットを受けて、保護者にどうしていくかが見えてくると思う。</p> <p>○ 地域や家庭にどう広げていくかという点では、マーケティングの視点も含め、新しい知見、視点が入っているのでそれを組み合わせ、いろいろな活動に広がっていければと思う。</p>

読書バリアフリー計画についてのグループ協議		※進行：内勢委員
進行	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 事務局から依頼のあった「県生涯読書活動推進計画」の見直しである「読書バリアフリー計画」に関する部分について検討をしていく。</li> <li>○ 1頁について、「障がいのあるなしに関わらず」という文が加わっているが、これについて、何かあれば御意見をお願いしたい。</li> </ul>	
中島委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 人権保障について文言が加わるともっと確かなものになるのではないか。「障がいのあるなしにかかわらず、サービスを受けられる」といった趣旨の部分を、人権保障という言葉に変えるとよいのではないか。</li> </ul>	
田中委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「障がいだけでなく、年齢や、立場、さまざまな個性の方々を対象としている計画である」と分かるように表現すると良いのではないか。</li> </ul>	
成合委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 福祉的な領域でいうと、共生という言葉があり、共生のための学びの枝分かれにこの読書である生涯学習の場をイメージしている。何のための読書、日本一の読書県なのかといたら、おそらく、共生というところに、入っていくのではないかと。「誰もが」とかよく言うが、「誰もが」とすると、抽象的になる。事務局として、対象の標記について、はっきりと打ち出していこうとしているのか。</li> </ul>	
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 今回の計画では、「共生」という単語を使用していない。「誰もが」という標記を使用することを考えている。</li> </ul>	
中島委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「障がいのあるなしにかかわらず」というフレーズを入れた理由を聞かせて欲しい。</li> </ul>	
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「バリアフリー計画」を含むことを明確に示すために「障がいのあるなしにかかわらず」というフレーズを入れた。</li> </ul>	
大賀委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 視覚障害者センターは、見えないとか見えづらい方が対象になるので、どなたでもその方に合う読書の方法という視点をいつも考えている。</li> <li>○ 高齢な方には大きな文字、小さい子にはルビがある等、見えづらい方には音声や点字、電子書籍といった、テキスト化されたものがある等、その方に合う読書の方法が提供できるということが、「読書バリアフリー法」だと理解している。</li> </ul>	
障がい福祉課	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 元々、障がいのあるなしに関わらずすべての人を対象とした計画も含んでいたが、バリアフリーに特化したため、「障がいのあるなしに関わらず」という言葉が入ったのだと考えている。</li> </ul>	
高八重委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 視覚障がい者には、視覚障害者センターがあるが、他の方にはサポートがあるのか。サービスを受けたい時、自分で人に聞くことが難しい人もあるので、相談する窓口があるとありがたいのではないかと。</li> <li>○ 障がい者をつくると疎外されている気がする。バリアフリーという言葉には、障がい者だけでなく、すべての人という意味が込められていると思う。障がい者にだけでなく、全ての人全ての人に思いやりを持って関わって欲しい。そのような計画になると良い。</li> </ul>	
進行	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 事務局案を読んだ時、「障がいの有無にかかわらず」という文言が気になった。「バリアフリー計画」であるので強調したい部分であるが、一方で、誰にとってもバリアフリーなのであれば、あえて「障がいの有無」というキーワードを使ことに少々違和感を感じている。</li> </ul>	



	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 元々の文章が、子どもから大人まですべての県民となっているが、あえて「障がいの有無」というキーワードを入れるべきか。</li> <li>○ 計画の「はじめに」の部分であり、すごく大事な部分だと思うが、文言として残した方がいいのか、とても難しい。</li> </ul>
田中委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 第2回の推進委員会で、「バリアフリー」について、地域差がすごくあると感じたことを思い出した。皆さんが言われるように、あえてここに「障がい」という言葉を使用しなくても良いのではないか。現行の「子どもから大人まですべての県民が」という標記でよいのではないか。「バリアフリー計画」を含んでいるということについては、下の部分に記載してはどうか。</li> <li>○ ここにこだわり過ぎてはいけないと思うが、「はじめに」の部分は、全体を包括してるような気がするので、大事なものだと感じた。</li> </ul>
進行	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 大切な部分であるのですぐに結論は出さず、「はじめに」部分は保留し、次にうつりたい。「計画の位置付け」部分について意見を伺いたい。(意見なし)</li> <li>○ 「⑥読書バリアフリー法の成立」部分は、読者バリアフリー法が成立した目的と経緯の説明になっている。何かご意見をお願いしたい。</li> </ul>
田中委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「障害」の「害」の標記について、ひらがなと漢字が使われているが、どのように使い分けているのか。違いに意味合いがあるのか。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 宮崎県が作った文章は、原則として「障がい」と標記し、国が作った法律などは「障害」となる。しかし、今回提示している計画案では、宮崎県が作った部分についても「障害」と標記されている部分があるため、修正したい。</li> </ul>
進行	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「4障がいのある方の読書環境の整備」部分について、意見をお願いしたい。</li> <li>○ 「視覚障がい者等（視覚障害、発達障害、肢体不自由等の障害により、書籍について、視覚による表現の認識が困難な者）」の括弧内は、今回作成した文言なのか、国が示しているものなのか伺いたい。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 前回の推進委員会で、「視覚障がい者等」と標記したが、「等」の部分をしっかり示した方が良いとの意見をいただいたため、今回、括弧内の標記を加えた。括弧内については、国が示している内容である。</li> </ul>
進行	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国の計画で作られた文章ということであるが、少々引っかかっているのは、先ほどの最初の「はじめに」の部分と同じで、括弧内の「視覚による表現の認識が困難なもの」という標記について、視覚による表現の認識が困難な方ばかりでなく、アクセスの問題等、様々な問題により読書することが難しい方がいるが、この方については対象に入らない感じがする。バリアフリーには色々な要素があるのではないか。</li> </ul>
成合委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ その通りだと思うが、他のサービスとの切り分けもあるのではないか。読書環境の整備であれば、視覚による表現の認識が困難な者の標記について考える必要もあるかもしれない。</li> </ul>
中島委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ これまで図書館がやってきたことも含め、今回の表現になっているのだろうと理解した。</li> </ul>

	○ これまでの推進委員会で図書館が行っている障がい者サービスについてのパンフレットが示された。当事者からの声を受け、今後は、事務局案として標記された部分から整えていくという意味合いもあり、今回の表現にしてあるのだろうと考えている。
進行	○ この「視覚による表現の認識が困難な者」の標記については、このままの形で、中身の検討に入りたい。
中島委員	○ 「端末機器等」の表現について、デイジーと標記していないのは、パソコン等他の機器もあるので、「端末機器等」にしているのか。 ○ 音声のみのデイジー図書の制作は進んできたと思うが、図形等も含めたマルチメディアのデイジーまでは行き着いてないところがあるので、思い切って具体的な機器を出すのも一つの方法ではないか。
事務局	○ デイジーに限らず様々な機器があるため、端末機等という表現にしている。
進行	○ 全体を通し、文言や内容、こういう言葉を入れた方がいいのではないか、この表記は補足説明があった方がいいのではないか等の意見をお願いしたい。
大賀委員	○ 先ほど意見が出たとおり、様々な媒体や端末については、具体的に記載した方が良いのではないかと。「端末機器等」という単語だけを見ても何を指しているのか全然想像ができない感じがする。
事務局	○ 計画本文の中に入れるのと、欄外に言葉の説明として入れるのとどちらが良いか意見があれば伺いたい。
大賀委員	○ 欄外にまで目をとおさない可能性もあるので、できればこの後ろの方が良いと感じている。本文の中に入れることで、様々な端末機器があることを知ってもらい、どう使用するかなど興味がある方に広がりがあると良い。
事務局	○ 具体的にはデイジーや音声読み上げに対応するパソコンやタブレットを想定しているが、これ以外にこれは入れておいた方が良いという情報があればいただきたい。
大賀委員	○ どの程度需要があるか、活用されるかはわからないが、点字ディスプレイやスマホを使ってのアプリもあるので、具体的にそこまで書くのかどうかはともかく、様々な手段がある。
中島委員	○ ICTの活用が進んできているので、今の意見をベースに書くと子どもから大人までというところには結びつき、一番良いのではないかと。
事務局	○ 参考に、高八重委員が使用されている機器を教えて欲しい。
高八重委員	○ デイジーである。 ○ 様々な障がい種の方がいると思うが、相談できる窓口を示して欲しい。知り合いに三本の指しか動かせない方がおり、犬の動画を見たいと言われていた。パソコンを利用して調べたところ、三本指で見ることができると動画が見つかり、紹介できた。様々な障がいに応じた相談窓口を明確にしていきたい。様々な情報が得られる相談窓口を示して欲しい。
進行	○ 様々な障がいのある方が相談できるような窓口を明記して欲しいという意見は、図書館利用に関わる体制の整備のところに記載されるとよいのではないかと。

事務局	○ どのように記載するか事務局で考えたい。
田中委員	○ デイジーが商品名なのか、端末機器の総称なのかがよくわからないので、説明があると、どのようなものか、対象は誰か、がわかると感じた。 ○ 「端末機器等及びこれに関する情報の入手支援」の「入手支援」の部分について、図書館でちょっと使用するという短期的な入手なのか、自宅で1週間程度借り、実際に使用することができるという支援なのか。または、使い方が分からないがちょっと使ってみたい、チャレンジしたい時、図書館スタッフに使い方やテクニックを教えてもらえる支援なのかも今回の事務局案ではわからない。相談窓口をはっきり示すことは大事だと思う。ただスタッフが相談窓口で常駐するというのは多分無理なので、相談担当者は例えば腕章で示してはどうか。 ○ どのようにこのサービスを利用していいのか、サービスの対象者やサービス内容についてもわかりづらいと感じた。
事務局	○ 具体的なサービス内容については、どこまで今回の「読書バリアフリー計画」で示すか事務局で検討したい。 ○ 用語の説明については、デイジーだけでなく他の言葉についても説明が必要な部分があれば意見をいただきたい。
中島委員	○ やはりデイジーは分かりづらいと思う。デイジーは、さまざまな方が活用できるということを知らせる必要がある。学習障害やそのほかの要因により、読むことに苦手さを持っている子どもも、デイジーを使って読書に親しむことができるということになっているので、このような背景も示すと、理解がもっと深まるのではないかと思う。
大賀委員	○ 人材育成について、具体的なことは今後進めていくというようなイメージなのか。
事務局	○ 人材育成については、障がい福祉課と今後検討が必要であると考えている。
障がい福祉課	○ 現在、障がい福祉課の福祉事業の中で点訳者、音訳等の養成を行っている。今回の読書バリアフリーにおける人材育成は、読書バリアフリーや読書に特化して、養成をしていくというスタンスなのか確認したい。
事務局	○ 読書環境の整備を進めるにあたり、今までの推進委員会の中で、講座は行われているが、まだまだ人材が不足している、もう少し増えた方が充実するといった意見が出されている。この人材の育成という課題について対応の必要があると考えている。
障がい福祉課	○ 今後調整が必要になってくる案件であるので、協議等行っていきたい。
大賀委員	○ 今は障がい福祉課の委託を受け、視覚障害者センターが、音訳者、点訳者の養成を行っている状況である。今後、県立図書館と手を結んだり、支援学校のボランティアしてもらったりという方と手を携え、アクセシブルなテキストデータを作ったりすると、さらに分厚いサービスができるのではないか。
成合委員	○ 人材育成の話が出たが、今後、連携協働をして、新たな活用を作り出す際、そこを調整する役が絶対的に必要だと思う。福祉政策や図書館の政策などそれぞれあると思うので、うまく連動させていくことで、新しいものができたり必要なものができたりする。接着剤みたいな役が、絶対的に必

	<p>要ではないか。よくコーディネーターという言葉を使うが、多分この今の話でも一緒ではないか。人材を養成しても、グループを作っても、単発ではなく、今までやってきたことプラス、新しいものを作っていくっていくことは重要なのではないか。</p> <p>○ 人材を作るだけでなく動き出すためには、何かが必要だと感じる。</p>
進行	<p>○ 人材育成してもそれが活用できないと意味がない。共生社会（協議会）も含め、実践を継続させていくところをどこが担うか、誰が担うか。とても大きな課題である。</p>
田中委員	<p>○ 視覚障がい者等の「等」の表現について、前回の推進委員会を受け、具体的に障がい種が加わった部分では、以前よりも進歩した。</p> <p>○ この計画は、定期的な改正があるのか。例えば、5年続くのであれば、もっと内容を加えないといけないのではないかと思う。1年に1回見直すのであればとりあえず、今出されている案でやってみるのも一つの手段である。</p> <p>○ 具体的なゴールや目標値はどうなっているのか。</p>
事務局	<p>○ 目標値について、現在の「県生涯読書活動推進計画」の一番最後に管理指標がある。現在、ここに読書バリアフリーに関する指標が入っていないため、加える予定である。</p> <p>○ 現在の「県生涯読書活動推進計画」は、平成30年から令和9年までの計画となっている。ちょうど中間年である令和4年に見直すことになる。管理指標の検証については、毎年行っているが、計画自体を見直すことは想定していない。</p>
田中委員	<p>○ 令和9年までの計画は長いと感じる。行政は曖昧な文言で文章を作るが、多角的に行うために、いろいろな対象に合わせるために、少々曖昧な言葉を使うということを知ったことがある。これに近いものもあると思うが、令和9年までこの文言のままどの程度進むのか心配である。</p>
事務局	<p>○ 今後、今回の「県生涯読書活動推進計画」を基に、具体的な取組を計画していく。そして、具体的な取組については、毎年、この読書活動推進委員会で評価していただく流れである。</p>
中島委員	<p>○ 現在の取組である「読書県みやざきを目指した総合推進事業」について、今回、今年度のまとめが示されたが、すでに障がい者理解、障がい者サービスについて取り組まれ、スキルアップも図られている。現在の取組をもう少しPRしていけば、これまでの取組も含め、宮崎の読書県を推進し、さらに、新たなものを作っている点を示せる気がするのでもっと周知していくといいのではないか。</p>
進行	<p>○ 最後に、用語の説明について、「アクセシブル」は説明があるとよい。</p>